

オーセンティックな学びを追求した 中学校社会科授業実践

ー 学校を超えた価値のある学びをどのように実現するか ー

学籍番号 239314

氏 名 橋岡大将

主指導教員 手取義宏

副指導教員 串田秀也

1. 問題の所在

いつでもどこでも様々な媒体から情報を入手できるようになった今、学校の授業が知識伝達
の場として機能する役割は薄くなったといえる。ゆえに、授業のあり方を見直し、授業をより
有意味で価値のあるものにしていくことが肝要ではないだろうか。

しかし、現状の学校は、著しく閉鎖的である。文部科学省が「社会に開かれた教育課程」と
謳っているものの、その多くは学校運営上の問題であると捉えられ、カリキュラムや教育内容
そのものを市民社会に開いているわけではない。そのため、今なお学校現場では知識伝達型暗
記学習が主流であり、そこで獲得された知識は学校内でしか通用しないものにとどまってい
る。つまり、そこで行われているのは、定期試験で良い点を取るための学びや入学者選抜を突
破するための学びである。このような現状を生み出している要因として、学校と市民社会を切
り離し、子どもを学校に閉じ込め、学校内でしか通用しない学びが続けられていることが考え
られる。これを変革するためには、学校と市民社会の関係を結び直していく必要がある。

2. 研究主題

社会科の最大の目標は、「公民的資質」の育成である。公民的資質とは、「①市民として必
要な知識や技能」「②よりよい社会を形成しようとする態度」である（田本，2024）。現場の
参与観察や論文等から「汎用性（一般化）」や「概念的知識の獲得」など知識・技能の習得に
重点を置いて授業を進めているケースが多いようである。一方で、市民社会への生涯的な参加
を促す意識を持った授業は、数少ないように思える。定期試験や入学者選抜を想定した、いわ
ゆる学校内でしか通用しない学びは、それらの目的が達成されれば洗い流されてしまう。ゆえ
に、主権者たる市民を育成するために、学校と市民社会を結びつけ学校を超えた価値のある学
びを展開していくべきではないかと考えた。

そこで、筆者が着目したのがアメリカの社会科教育研究者であるフレッド・M・ニューマン
が提唱した「オーセンティックな学び」である。ニューマンのオーセンティックな学び論は、
教師の教授と生徒の学習が、①知識の構築②鍛錬された探究③学校を超えた価値のある学びの
3つの基準を満たすものであるとされる。しかし、梶谷（2024）および、大勝（2022）のオー

センティックな学びの実践に関する先行研究からもわかるように、両実践とも「学校を超えた価値のある学び」に結びついていないことに課題がある。現場の実態等から実際に市民社会に影響を与えることや参加することの実践については、あまり言及されておらず、実践することにはかなり困難を要しているようである。そこで、本研究では、ニューマンのオーセンティックな学び論に基づいて、「学校を超えた価値のある学びを中学校社会科地理的分野においてどのように実践できるのか」をリサーチクエスションとした。

3. 本研究の対象と方法

本研究では、大阪市立A中学校2年生の生徒160名を対象とした。地理的分野の「中国・四国地方」において、「JR芸備線の存廃問題」という公的論争問題を軸として、パフォーマンス課題を取り入れた全6時間の単元を開発し、2024年7月に筆者が実践を行った。

そのなかで、「JR芸備線の存廃問題」における問題の当事者である庄原市役所や学習者である生徒へのインタビューを通して、両者から捉える学校を超えた価値のある学びについて考察した。

4. 本研究の成果と課題

本研究の成果は、三点ある。一点目は、型や手順が示されていないニューマンのオーセンティックな学びを実現するために、JR芸備線の存廃問題という公的論争問題を軸として、パフォーマンス課題を取り入れた実践を開発できたことである。二点目は、生徒のパフォーマンス課題の作品を、実際に問題の当事者である庄原市役所に見てもらい、コメントをいただけたことである。教師が媒介者となり、学習者である生徒と問題の当事者である庄原市役所をつなぐことができたことは大きな意義があるといえる。三点目は、「学校を超えた価値のある学び」について、学習者と問題の当事者の視点から捉えたことである。学習者も問題の当事者もこの学びについてそれぞれの意味や価値を見出すことができた。

一方で、本研究全体を通しての課題を四点提示する。一点目は、授業における課題である。教科書内における知識を再生産することを求めていた活動もあり、真に「知識の構築」を図ることができなかった。二点目は、異見を持つ人や価値観の違う人との議論など様々な形態のコミュニケーションをとる十分な時間を確保することができなかったことである。実践に工夫を施したものの、よりよい言説（作品・パフォーマンス）生み出すために、議論経験を生徒にさせる意義は大いにあると考える。三点目は、全ての生徒の作品を問題の当事者に見てもらうことができなかったことである。本研究でピックアップした作品は、ループリックで高い評価を得たものであった。結果的に、それらは相対的に高い学力を有する生徒たちの作品であった。しかし、定期試験の点数や学業成績が悪い生徒でも、このような学びにおいては、創造的に思考を働かせ、想定もしないような言説（作品・パフォーマンス）を生み出すかもしれない。その点は、今後の課題としたい。最後に四点目は、社会科における他の分野、特に歴史的分野において、「学校を超えた価値のある学び」を追求していくことについての課題である。歴史的分野においては、直接的な現代とのつながりが見えにくい分野であるため、本実践を汎用的に捉えることはできないであろう。この点も、今後の課題としたい。